

みめじみの

第3部



みめじみの

第3部



大谷光道著

目次

凡夫	2
……	……
良い行い	2
お釈迦様の予言	5
うそも方便?	10
他力	17
……	……
めぐらしむける	17
「他力」は「他人力」	20
のことか?	……
現世利益	23
「阿弥陀仏を信ずる」	26
のではないのか?	……
神と仏	28
……	……
あとがき	31

凡夫

良い行い

先日、家族とよく行く店でおそばを食べ
てましたら、隣のお客さんのにぎやかな声
がしてきました。

「今、いい話を聞いてきてねえ」

「へえー……」

中年の男女数人の客で、どうやら近くのお寺でお説教があったようでした。



続いて、

「でも、毎日そんなことできないしねえ」

というのが聞こえてきました。

どんなにいいことを聞かしてもらっても、仲々実行できません。聞いてきたその日一日でもできれば、いい方です。実行はできないのでせめて覚えておくだけでも思っても、その日の晩まで持てばいいほうでして、ひと晩寝たらけろつとして、どこへ行ってきたのかまですっかり忘れてしまっている。まあそういう私たちです。

また、あちらこちらによく標語が書いてあります。標語カレンダーとかいって、縦長の紙が綴じてある二行ほどの、毎日めくるのありますね。ずいぶんいいことが書いてあります。そのときは「なるほど」と思うんですが、書いてある文句を覚えておくだけでも仲々難しいことです。それを実行するということになりますと、一日、二日どころか何時間かでも続けばよっぽどい

い方です。

いかがですか。

この間、道で丸い物が落ちていたので、「ひょっとして十円玉では……」
と思つてしゃがみ込んで見たら、電気工事の部品でした（笑）。次の瞬間、
さつきまで頭にあつた標語カレンダーは真つ白になりました（大笑）。

このように「凡夫ぼんぶというのは大変情けないものである」ということは昔から
変わつておりません。いろんな良い行ぎょう——行い、修行——をやつても仲々
身に付かない、自分の力で、忍耐で、行をやろうとしても仲々続かない。ま
れにかなりの間それができたとしても——形の上ではやり通せたとしても
——自分は何をやつていたのかわからなくなつたり、中身が全く身に付いて
いなかったり……。こういうのが凡夫です。

「いいこと」と思つても実行できない。標語カレンダーも内容を覚えてい
ることもできない。こんな凡夫は仏法とは無縁むゑんの者なのでしょうか。

お釈迦様の予言

ここで、次の文を味わってみてください。

問うて言う「菩薩が修行をしていく中で不退の位ふたいくらゐ（もう後戻りしないというしつかりした心の状態）に至るには、多くの難行を行い、たいへん長い時間をかけてようやくこの位を得ることが出来る。

もし諸仏の説きたもう中に、易行道いぎようどう（易やさしい修行の道）ですみやかに不退の位に至ることのできる方法があるならば、どうか、わたしのためにこれを説かれよ。」

答えて言う「そなたが不退の位を得る法は甚はなはだむずかしく、久しい間かかってようやく得ることが出来る。もしすみやかに不退の位に至ることのできる易行の道があるかというならば、これはすなわち根機こんき（修行し得る能力）の劣った弱い者の言葉で、すぐれた人、雄々しく堅固な志を持つ

者の言うことではない。しかしながら、そなたが、もし必ずこの方法を聞きたいと思うならば、今まさにこれを説くであろう。

仏法には量り知れない多くの門戸がある。たとえば世間の道路に難しい道と易しい道とがあつて、陸路を歩いて行くのは苦しいが、水路を船に乗つて渡るのは楽しい。菩薩の道もまたこのようである。あるいはいろいろな行を積んで行く者もあり、あるいは信方便（信心という手段・方法）の易行をもつて速やかに不退転の位（不退の位）に至る者もある。」

《『十住毘婆沙論 第五 易行品 第九』》

浄土真宗本願寺派 聖典意識 七祖聖教 上より抜粋・著者加筆》

これは、千八百年近く昔、南インドに出られたりゅうじゅ龍樹菩薩が著された『十住毘婆沙論易行品』という書物で、浄土真宗の根本が示されています。

龍樹菩薩は親鸞聖人が最も敬われた七人の高僧の中で最初のお方です。

凡夫

（釈迦仏——龍樹菩薩——天親菩薩——曇鸞大師——道綽禪師——善導大師——
源信僧都——法然上人——親鸞聖人）



龍樹菩薩

日本で仏教といえはまず大乘仏教ですが、龍樹菩薩はその大乘仏教の祖であり、浄土真宗のみならず各宗旨においてもきわめて重要なお方なので、「八宗の祖師」といわれています。

さらに、お釈迦様が楞伽山りやうがせんで説かれた楞伽經に龍樹菩薩の一代のことが予言されていることによって、やがて生まれるであろう龍樹菩薩に託されたお心のほどが明らかです。皆様がた、いつも唱えておられる正信偈にもご和讃にもこの予言のことが出ていますね。

この比喩ひゆでは仏法を陸路と水路の二つに分けておられます。現代ではさらに空路というのもあり、また水路よりかえって陸路のほうが速いぐらいですが、千八百年も前のインドの自然や、足で歩くしかなかった生活の苦勞がうかがわれます。

「根機の劣った弱い者の言葉で、すぐれた人、雄々しく堅固な志を持つ者のいうことではない」

という部分が陸路と水路の選択の分かれ道です。自分を「根機の劣った弱い者」と思いたくないのが人情だし、「すぐれた人、雄々しく堅固な志を持つ者」でありたいものです。

しかし、先ほどから見てきているように、現実の自分のことを考えると、そんな贅沢は言っていられません。

ここで「諦^{あきらめ}」という字を思い出してください。

「あきらめ」は「あきらみ、」から来ているといわれます。「あきらみ」とは「明ら見」、つまり「あきらかにみる」ということであって、明らかに見るという積極的な行為がいつのまにか「あきらめる」という消極的なことばにつながってしまったようです。しかしなぜやりの「あきらめ」ではなく、物事を正しく厳しく見た（あきらみ）結果の「あきらめ」は少しも消極的ではありません。それゆえ、「諦」はさらに「真理」「さとり」という意味も持っています。

自分自身を「あきらみ」して難行道をあきらめ、易行道に進むのが浄土門の教えです。ここで凡夫が仏法と無縁ではなくなるのです。

うそも方便？

そこで、

「あるいは信方便の易行をもつて速やかに不退転の位に至る者もある。」という、この仲間に入ることが肝要であることになります。

「うそも方便」ということから、方便とはうそを正当化するときや、うそのことだと思っている人がいます。方便とは「手だて」ということで、うその代名詞ではありません。

今本題の「信方便」というのは、信という方便——仏を信ずるという手だて——↓仏を信ずることをてこ梃子にして——↓「信」というきずな絆で仏と結ばれる、密着するということだから、何の苦勞もなくまさに易行であります。仏と密着



することによって、「仏が修められたあらゆる行がそのまま私の行として働いてしまう」ということです。前のたとえのように、仏という船にただ乗せてもらっているだけということです。

つまり「信方便の易行」というのは、「信心という手だてによって阿弥陀様とつながって念仏を称える」ということで、これが浄土門の要かなめであると言えます。

浄土門には、私たちの浄土真宗のほか、浄土宗や西山浄土宗せいぎんなどがある

ります。

ここで、

「仏教は多くの宗派に分かれています、なぜなんですか。」とか、さらには「一つにはなれないものなんですか。」などという質問を受けることが時々あるので、この機会にそのことについてお話しましょう。

お釈迦様は無数の法を説かれました。このことから仏教は教え全体としての統一性はどうなっているのだろうかと思われることもあるでしょう。しかしよく見ると、全部一貫していることがわかります。なぜかという、仏教で一番大事な事柄が覚^{さと}りであるということで、覚^{さと}りという仏教の目的であり終着点であるものが、たった一つだからです。

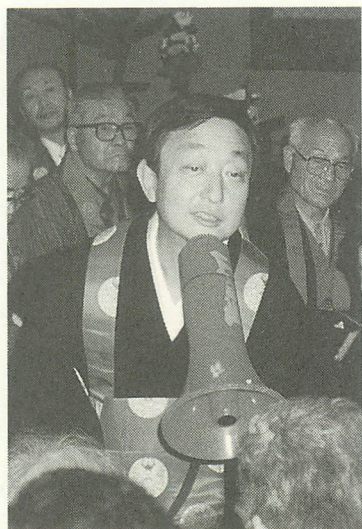
このたった一つの終着点に至る道は一つでなくても、いくつあってもいいし、みな各々どこをどう通ろうと自由なんです。十人十色ということが、覚^{さと}りに至る道にも通用します。人によって生まれてから今日までの道のりは皆

違うし、各々の個性も違います。だから夫々の入りやすい教え、身につけやすい教えは皆違います。この道筋は、極端なことをいうと人間の数だけあってもいいわけです。だから、教えの数を増やさせたのは実はお釈迦様の弟子たる私たちの方であって、お釈迦様ではないのです。

山に登ることを例にとつて見るとよく分かります。歩いて登る道、けもの獣道といわれる猪や熊などが通る道、自動車道路、ケーブルカー、崖や岩を登る道。ちよつと考えて見てもすぐこのぐらいいは思い浮かびます。ひよつとするとヘリコプターが頂上に降りられるかもしれません。このうちどれを選ぶかは全くその人の自由です。途中まで車で行ってそこから歩くなどの組み合わせもあります。

頂上でにこにこ待っていてくださるのが、また「どこからでも登ってこい」と檄げきを飛ばすのがお釈迦様です。

もう一つ大事なのが「登山口」です。私の、皆様方一人一人の足元、現実



の「私の実態」です。

お釈迦様は「人を見て法を説く」
をやっているうちにいろんな山の登り方を説いてしまったというわけです。お経（お釈迦様の言行録）の数の多いのも、宗旨の数の多いのもその理由はこういうことによります。

だから各宗旨がまったく別の教えというのではなく、覚りに至るための方法論の違いだと考えればいいんです。

このことを「仏教に無量の門がある」と言ったり、「八万四千の法門」と言ったりします。八万四千とは数の多いという意味で、実際に八万四千個という意味ではありません。

この山登りのたとえ、さっきの龍樹菩薩のお話に似ているでしょう。でも

これ、自分で考えたんですよ（笑）。

凡夫について大事なことをもう一言付け加えておきます。

「親鸞の教えは好きやけど、浄土真宗は凡夫の教えであるというじゃないですか。私のように一流大学を出た者に凡夫と言われても、抵抗を感じるんですが……」と言う人がいて、自分のことなのに一流大学と言ったのにまず驚き、大学を出て凡夫でなくなったつもりこの人に、何と言おうかと、頭を抱えてしまいました。

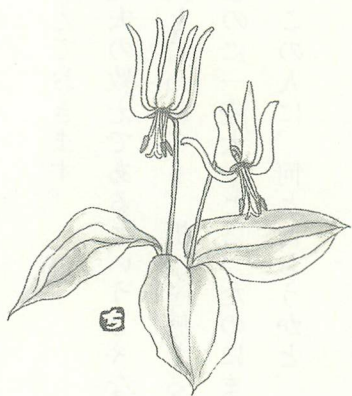
この人は、「凡夫」というのが学歴か何かで決まるとでも思っているのでしょうか。

凡夫というのは、あくまで「凡夫感」であって、客観的に他人からどう見えるかではありません。「情けない自分を情けないと思う」ことができるかどうか。本当にそう思えるかどうかということが問題なんです。

「馬鹿になる」といいますが、馬鹿になるのではなく「馬鹿である、自分を

見いだす」ことなんです。

実はこれも阿弥陀様のお力によらねば実現しません。阿弥陀様の光明によって照らし出される自分を見いだす、この時初めて凡夫である「私」を見いだすことができるのです。そしてその時、同時に本物のお念仏が出るのです。これを「信心」と呼びます。



他力

めぐらしむける

今日は、阿弥陀様のお力、本願力がいったいどのようにして私たちの所に届いてくるのか、というお話から始めましょう。

「^{えこう}回向（または廻向とも書く）」という言葉があります。

真宗では言いませんが、「お寺さんにご回向していただく」と、よく申します。亡くなった方のお勤めをしてもらう（お経を上げてもらう）のに、



「回向していただく」といういい方をいたします。亡くなった方の冥福・菩提を祈るという意味で、「回向する」という言葉を使います。

なぜお勤めをするのが回向なのかといいますと、回向というのはその字の通り「回^めらし向ける」ということで、良い行い——善行^{ぜんぎょう}ですね——を積み重ねてそれを他人^{ひと}のために回らし向けることによってそれがそのまま功德になるので、あらゆる良い行いをして他人のために、ここでは読経——という良い行い——の功德を死者の冥福・菩提のために回らし向けるという考え方から、「お勤め〓廻向」ということになるわけです。

ところが、浄土真宗では私たちの行う回向というのはなく、「回向は阿弥陀様から頂く、つまり、本願力の回向である。」と教えます。「私は、回向できるほどの立派な行いを積み重ねる力を持ち合わせない凡夫である」というところに、浄土真宗の入り口があるからです。このことを「不回向」といいます。

自分で良いことを積み上げてそれを回向しようとするんだけど、それだけの力がないことを深く味わうとき、本願力が回向（回らし向ける）されて来て、私たちの口にお念仏が出ます。

阿弥陀様は、本願をお建てになってから果てしなく長い間のご修行によって、「南無阿弥陀仏」というたった六字の中に無量の功德を詰め込んでくださいました。それを私たちにご回向くださるときに、私たちの口から出るのがお念仏です。

本願力は阿弥陀様の力のことですから、本願力＝仏力です。仏力はまた他力ともいいます。この本願力の中身は、私たちを往生させる力、成仏——覚ることですね——させる力、だから往生力であり成仏力である、これが本願力であります。

本願力、他力、仏力。どの言葉を使っても同じ意味です。

「他力」は「他人力」のことか？

「親鸞の他力本願ではだめだ」という発言をして抗議を受けられた政治家の話が何度かございました。

私たちも、人を当てにしたり「これはだれかがやってくれるだろう、だれだれさんがしてくれるだろう」などと、人だのみにすることがよくあります。そしてまた、「人だのみにするな」と、ひとに言ったり、また言われたりしています。

この政治家がおっしゃりたかったのは、まさにこのことであって、ご本人としてみれば、つい力が入って「親鸞の……」とまで言ってしまっただけのことだったのでしょう。

確かに、「他力」といえば、他^たの力であって、人だのみのことも含まれます。しかし、「親鸞の」といえば浄土真宗のことなので、その教えに



生きている私たちにすれば、「親鸞の他力本願、たい、い、な、ものを信じてる奴がいるからいけないんだ。」ぐらいのことを言われたような気になります。もつとも、こういう誤解は私たちが日ごろから、浄土真宗を世間一般にもっと広く理解してもらおうとする努力が足りないのではありますが……。

「人だのみにする」とと浄土真宗でいう「他力」というのとは全く違います。どう違うかというと、私たちのいう他力はぶつりき仏力、仏の力であります。たのみにする相手は、覚りを開いていない私たちのような者の力

ではなくて、さきほどから申し上げている本願力、つまり阿弥陀様のお力であるということです。

覚りを開く、つまり成仏するということはどんな人間にでも可能ではありません。可能であるということは理屈であって、今日までに一体どれだけ多くの方々が覚りを開こうと修行をしてこられたでしょうか。しかし今までに「お釈迦様の後（現世では）どなたも成仏なさっていない」と言われております。それほどに成仏するということは大変な困難なワザでなのです。

だからこそ、他力・本願力によってしか、私たちは往生、そして成仏をさせていただけないわけです。こういう仏力をたのみにする（あてにする）ことと、人だのみという、根本的に次元の違ったものをごっちゃにして、「他力本願では駄目だ」などと片付けられてしまうということはまさに残念なことです。

他力という言葉を、自力——自分の力——に対して他、「自」に対して

「他」という言葉を使い出したというところに、あるいは誤解の元を作ったのかも知れません。とはいっても曇鸞どんらん大師というお方の使い始められたお言葉で、私どものとやかく言えることではありません。曇鸞大師（およそ千四百年前、中国北魏の時代の方）は、御開山親鸞聖人が、ご自分にまで浄土の教えを伝えてくださった七人の高僧の中で、三人目に仰がれているお方であります。（7頁参照）

往生・成仏という一大事に当たっては他力——本願の力——による、本願力によるほかはないということが、浄土真宗の教えの大きな要であります。

現世利益

そこで、この本願力によって、「私は必ず往生成仏できる」ということを確信するのであります。この根本的な私たちの安心感——安心あんじんといいますが安心感であると思っています——これによってもいいです——これによって起こってくる

事柄・現象を現世利益げんぜりやくと名付けます。

現世利益というのは、私たちの信心（安心のこと）の結果、起こってくるもので、普通に考えられている現世利益とは根本的に違います。つまり、目的にした現世利益ではない、「利益をあてにして神仏を信じるのではない」ということです。

例えば、「お金儲けもうがしたい」、或いは「大学の入試に合格したい」というような、「したい」という思いを、神や仏にお願い或いはおねだりして、それを叶えていただく、実現していただくという場合を考えてみましょう。これは、物の入手や事柄の実現が目的であり、それを叶えてもらうのが結果であるので、目的と結果の内容が同じです。これがいわゆる現世利益です。

ところが、私たちのところの現世利益は、「信心の結果としてそれがついてくるのであって目的ではない」というところが大きく違います。もっと別の言い方をすると、私たちの頂く現世でのご利益というのは、「おまけであ



る」「付録である」ということです。私たちが信心をいただいて、念仏を称

える、そういう生活をするることによって、「気がついてみたらいろんなご利益を頂戴していた」、これが浄土真宗でいう、現世利益です。

私たちは皆、自分のやらなければならない事柄を持っています。それがいつも自分にとってすばらしい、前向きのものであるとは限りません。やりたくない、逃げ出したいものであるときにでも、やるべきものを見せ、方法を教え、何よりもそれをやり通す勇気を与えてくださるのが、阿弥陀様の本願力。

「氣を取り直して」とか「ふと我に帰って……」とかいうこともこれに含まれると思います。こんなときは必ず、お念仏を称えてしまっていることに気づかれていると思います。こんな現世利益が浄土真宗の現世利益なんです。

「阿弥陀仏を信ずる」のではないのか？

お気づきになっているでしょうか。

「弥陀の本願を信じて」とか「本願を信じて念仏を申さば仏になる」というように、いつも本願ということがいわれます。「弥陀を信じて」ということはまず言いません。これはなぜかということですね。同じことなんです。どうしてなのか気になるところです。

阿弥陀様というお方はいつもお話するように、大昔に成仏なさった仏様で、その前は法蔵菩薩という菩薩、人間ですね。そういう「人格」、「主体」

ですね。ところが「人」というと、意志や意図を持った主体を連想してしまいます。

そういう人格を中心にするのではなくて、その本願、お心、お心の中身、それを中心に頂いていくということです。阿弥陀様というお方が本願をお建てになった、その本願のルールを中心に頂いていくということです。本願をお建てになってその本願に沿って——本願を実現するために——ご修行になり、成仏されたお方です。阿弥陀様だけでなく、仏様・如来様はみなそうで、本願の成就したお方です。

これは「支配者」であつたり「造物主」であつたり、つまり「神」ではないということです。よその宗教では神様が私たち人間はもちろん、地球や自然などすべてを作った主であつて、すべてを支配しているのも神であると説き、神の意志に従うようにしなければならない、と教えます。

ここのところが仏が神と違う重要な特徴です。「阿弥陀様を信ずる」と言

ってもいいのですが、そのように言う「阿弥陀様の意志に従う」「阿弥陀様の支配に服従する」という意味に取られたりして、それが長い間にそのまま服従の意味になつてしまふという心配があるので、そうではないんだということをより明確にするためにも、「阿弥陀様を信じる」という言い方よりも、「ご本願を信ずる」「弥陀の本願を信ずる」という言い方をするのです。

神と仏

さつきも申しましたように、概ね、よその宗教でいう神はすべてのものを創造し、そして人間その他すべてを支配する、人間は神の意志に沿うように一生懸命お祈りをする、そしてその祝福を受ける、ですから神は意志を持つておられるわけですね。

これに対して仏は、私たちを支配する主ぬしではなくて、「真実を知らせようとする方」であります。ご自身が覺りを開いた方であり、「覺りを開く方法

を私たちに教える、開かせるように私たちの後ろから後押しをする」主であると言えます。「物事があるがままに正しく見るんだ」というのが仏法の入り口ですが、そういうことを教えたり私たちを後押ししたりするのが仏であって、決して私たちを支配するものではありません。

よく、「罰^{ばち}が当たったから地獄へ落ちる」という言い方はします。これは仏の意図に反したためにその怒りに触れて地獄へ落ちるということではなくて、自分の行いが悪かったから悪い行いに対する報^{はら}いを自動^{じどう}的に受けるということで、仏の意志で地獄へ落とすではありません。

本来自業自得なんですから、「自分で地獄を選んだのだ」と言った方がもっとわかりやすいですね。このところ、つまり仏の意志によってどうこうするというものではないというところが、神と仏の違いです。

神と仏の違いということは案外わかっていているようで、「いざ尋ねられると……」と思われる方は、このお話が参考になればと思います。

先程のお話に戻りますが、なぜ「弥陀を信ず」と言わずに「本願を信ず」と言うのであるか、弥陀というお方が神と同じような存在であるのではなくて、あくまで私たちに真実を知らせ、そして私たちを成仏させようと、そういうことをするためにになるお方であります。このように改めてご理解頂ければ幸いです。

日ごろのお念仏の生活に、お役に立てて頂ければと思います。

他力を人だのみだなどと安易な誤解があることや、真宗の現世利益の特徴などもお話したのですが、多少内容を欲張りすぎたでしょうか。

あとがき

みめぐみの刊行委員会

日常生活は、全てが本願に生きる私であつたと。

「読みやすいので、繰り返し読んでいます。そのたび毎に新しい味わい、感動をいただいています。特に第2部の幻覚の項は、日暮らしのエッセンスだと、悩みごとに直面した私を振り返るおことばとして宝物にしています。」
「二河白道は、ただの譬えと思っていました。それが私のパワーの源であつたとは……。」など、

お寄せいただいた読後感も多様に亘り、具体化した内容がいただけるようになってまいりました。

お読みになったのちに、ご意見、ご質問をお寄せくだされば、順次、第4部からの内容にあわせて、織り込んでいただく予定をしております。

みめぐみの 第3部

1998年3月5日 印刷
1998年3月10日 発行

定価 200円

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒600 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
-8167 本願寺寺務所内

TEL. 075(351)3555 FAX. 075(351)3120
振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社

